面に出しました。

最初は60軒くらいから、女性が多かったので、おひなさまを飾ることから始めました。飾ってみたら、古くてもとても立派なおひなさまがたくさん飾られました。なかには戊辰戦争のときに燃えて、蔵の中に入れていたというものもありました。

今まで邪魔で、古くさいと思っていた蔵の中にあった調度品や、部屋の奥に置かれたものが、これは私たちのお宝なのよということで表に出たのです。それによって女性も前に出られるようになったのです。

市長 おひなさまというのが、とてもいいですね。だから女性が出やすかった。じゃあ私がちゃんと面倒を見なければというような感じが出ますよね。

また、飾るものは古いものかもしれない、あるいは傷んでいるものかもしれないけれども、それぞれのお店の主人なり、あるいはおじいちゃん、おばあちゃんなりにとって、とても大事な宝であったものを、お見せするというよりも、出したということですね。

山崎 そうですね。そこがポイントだったのではないかなと思います。

市長 ところで、おひなさまというのは、日が過ぎると早くしまえとか、いろいろな話がありますよね。

山崎 これはイベントとしてやっているのだから、3月いっぱいは飾りましょうということを何度通達しても、3月4日になるとおひなさまは片付けられてしまいます。聞いてみますと、家のしゅうとさん、しゅうとめさん、周りの方々が、「娘さんがお嫁に行けなくなる」と心配されたり、お客さまも好意的に「早くしまわなきゃだめよ」と言ってくださって、2、3年は徹底できませんでした。

皆さん、嫁という立場なので、しゅうとめさんに抵抗するようなことはあまりしたくないということで、素直にしまっていました。そこでこれは迷信なのだという文献を探し、裏づけをしました。

私たちは、何かやるとき、必ずそうした文献を探します。言葉で否定的なことを言っても、納得してくれません。こういう歴史があるのだということを見せると、皆さん納得されます。それからだんだん3月いっぱいまで、おひなさまを飾ってくださるようになりました。

市長 これを飾ってくださいではなく、一人ひとりが工夫できる仕掛けであったということが、とてもいいですね。

山崎 これまで女性はお店のことは口出しをせず、「手伝い」という感じでしかなかったと思いますが、自分のお店の商品の飾り方まで気になりだし意見を言うようになりました。あねさまたちが自立を始めた一つのきっかけになったと思います。

市長 それから、パレードも同時期にやったと伺いましたが。

山崎 はい。最初は恥ずかしくて、小さい声で早足で通りましたが、パレードをしようと思いついただけでも、私はすごいことだと思うのです。

2年目、3年目になりますと、自宅にある鉦(かね)やちょうちんを持ってきたり、消防署から拍子木を借りてきたりしました。

市長 なるほど、消防のPRを兼ねて。

山崎 地域の婦人消防団の方々も加わっていただいて、毎年2月の5～15日の間ぐらいにやっています。絶対この日にやらなければならないというと、なかなかできません。今年はいつごろやろうかとアバウトにしておくのがいいのです。

地域を越えた地域づくりをめざして

市長 それぞれの都合で対応しやすいですね。

山崎 一番出られる日にちを皆さんで選ぶ、それがいい方法だったのではないかと思います。

市長 それから、女性の視点からルール(アネッサ憲章)(注4)をつくられましたね。うまいぐあいに仕組みがつながっているような気がします。

会の立ち上げは、スムーズに盛り上がる状況だったのですか。

山崎 会をつくるときに、商店街婦人部の附属的な組織では嫌だと思い、私一人が最初は抵抗しました。しかし、そういう形でないと、このまちでは立ち上げられないと言われまして、妥協しました。商店街会長がアネッサクラブの活躍を目のあたりにして、独立しても大丈夫と助言していただき、2年後に独立しました。

市長 立ち上がったはいいけれども、というのがあるのでしょう。

山崎 そう、立ち上がったのですが、私たちは地域を越えた地域づくりを目指していました。同じこころ意気のある人ならどなたとでも一緒にやっていきたいのに、商店街単位でないと認められない、前例がないからだめだというのです。

でも、話し合いを通して市役所からも支援をいただき、立ち上げることができました。その力がないと、できなかったかもしれません。周りの協力があったからできたことだと思います。

市長 この「アネッサクラブ」という名前のつけ方が、単に女性の会とかというのではなくて、地元の言葉も使って、しかも「クラブ」という横文字風の名前でやるということが、古いところから出ていながら、でもちゃんと新しいことも見据えているという、視点が感じられて、とてもいいなと思うし、これが秘訣なのかと思います。

まちおこしの関係での連携はどうだったのでしょうか。

山崎 「まちの駅」を立ち上げようというときも、商工会議所の青年部や市役所の方の中に「アネッサクラブ」を入れてくださるのはいいのですが、相手方がどう一緒にやっていけばいいのか方向性が見えず難しかったようです。まだ、男性だけの会議が多いですから。

でも、市役所は認めているし、実現できそうなよいアイデアを持っている「アネッサクラブ」はまちづくりの会議に入れてくれます。

女性の視点で居心地のいい場所づくりのアイデアを出す

市長 行政との間で、もう少しバランスをとらなければいけなかったり、ちょっと不都合があったりとかはありますか。

山崎 行政からは、発足当時、商店街として認められないから、助成金は出せないということがありました。私たちも資金が集まらず困っていたところ、会津若松市役所の女性職員の方が、後押ししてくれて、優れたものには費用の3分の2を助成するアイデアコンペというものがあることを教えていただき、応募したところ、2年連続で入賞でき、それで事業の形にすることができました。その後、新潟県からも助成金をいただきました。現在は、福島県の振興局からも応援をいただいています。

▲アネッサクラブの活動等をPRしている「のきさき通信」

アイデアといっても、私たちが居心地をよくするにはどうしたらいいかを追及しただけです。つまり、私たちの居心地が悪ければ、お客さまも同じで、だれも来なくなります。私たちの居心地のいい場所をつくろうというのが私たちの原点です。

▲アネッサクラブの皆さん

市長 「アネッサ憲章」というのがあって、「のきさきギャラリー」が最初ですけれども、次に、居心地のいいまちづくりを目指すということですよね。

その次が、古さといいますか、日本のふるさとであり続けよう。まさにすべてが古くからずっとあったもの、それをちょっと工夫してお見せするという形で統一されているような気がして、新しいものを持ってくるのとは違うということですよね。

山崎 アイデアはあっても、みんな素人でわからない。こういうことをやりたいけれども、どうしたらいいのだろうか。そういう考え方から「アネッサ大学」という勉強の場をつくったわけです。必ず学習してから、実行しています。

市長 それは大事なことですね。ちょっとよさそうだからと、すぐ実施するというのではなくてね。

会員さんの通信で「のきさき通信」というものを出されていて、状況の報告、活動方針等のPRをされていますね。

山崎 発信することは大事だと思います。いまでこそ、8ページ建てで中身も良くなっていますが、最初はA4で1枚しか作れませんでした。

市長 あまり気張らないでね。

山崎 紙一枚だけでやっていたのですが、応援してくれた人の中に小さな冊子などをつくっていた方たちがいて、その方たちが手伝ってくれて、今の形になりました。

市長 ありのままというのか、今あるもの、今やっているものをちょっと磨くといいますか、そこから発想しているから、無理がないですよね。新たに何か考え出そうとか、持ってこようではなくわからないものは聞いて、ある程度確かめてから始めるということですね。

「あねさま」たちだけではどうしてもできない部分がたくさんあったと思うし、そこを応援団が、手伝ってくれる。応援を求める秘訣は何かありますか。

山崎 私たちがあまりにも未熟なので、皆さんが気の毒がって手を貸してくださるというのが実情ではないでしょうか。

市長 日野市も、平成12年にごみの有料化を実施したときに、「日野市はこんなにごみ量が多くて困っていますので、助けてください」とやりました。そうすると、意気に感じて手伝って

注4 アネッサ憲章

一、 私たちアネッサクラブは軒のつらなる店先に四季折々、会津の歴史や文化に彩られた「のきさきギャラリー」を展開します。

一、 そのギャラリーを通してふれあいのある楽しく、居心地のいいまちづくりを目指します。

一、 私たちは、会津のまちが日本の「ふる里」であり続けたいと願います。